

「なんか」と「こう」はなぜ相性がよいのか —フィラー連鎖「なんかこう」の慣習化をめぐる予備的検討—

呉 楚琦（一橋大学大学院生）[†]

李 海琪（総合研究大学院大学先端学術院）

What Attracts *Nanka* and *Ko* to Each Other? A Preliminary Study of the Conventionalization of the Filler Sequence *Nanka Ko*

Chuqi Wu (Graduate Student at Hitotsubashi University)

Haiqi Li (Graduate Institute for Advanced Studies, SOKENDAI)

要旨

日本語の話し言葉では、フィラー「なんか」と「こう」が連続した「なんかこう」がしばしば観察される。本発表では、この2形式がなぜ強く結びつくのかを、『日本語日常会話コーパス』(CEJC)と『日本語話し言葉コーパス』(CSJ)のコアデータを用いて、頻度分布、共起強度、韻律的統合の3つの側面から検討した。その結果、以下の3点が明らかになった。①「なんか」の後続要素との共起強度(logDice)を比較したところ、「こう」は対話で9.88、独話で9.81となり、いずれにおいても比較対象中で最も高い値を示した。②連鎖「なんかこう」の共起強度は「こうなんか」に比べて、対話で9.63、独話で9.61とほぼ同程度であり、談話形式による大きな違いは認められなかった。③2要素間にポーズを伴わない例は対話で96.2%、独話で85.3%に達し、高い韻律的連続性を示す一方、同一アクセント句内への統合は部分的であった。以上から、「なんか」と「こう」の結びつきは、描写や言葉探索という使用環境の共有と両形式の機能上の相補性によって動機づけられ、反復使用を通じて一つの定型的な連鎖として慣習化しつつある可能性が示唆された。

1. はじめに

日常の話し言葉を観察していると、話者が何かを説明したり、ことばにしにくい内容を描写したりする場面で、次のような発話にしばしば出会う。

- (1) そういうところに住んでいる人達っていうのは、何かこう、ほっとするようなところがあるんですね (CSJ: S00F0014)
- (2) なんかこう、なんだろう、糸、素材がわかんないんだけど (CEJC: S001_018)

いずれの例にも、フィラー「なんか」と「こう」が連続した「なんかこう」が含まれている。(1)では、明確にことばにしにくい感覚を表現しようとする直前に、(2)では、適切な語を探索している過程で、この連鎖が現れている。このように見ると、「なんか」と「こう」は、話し言葉において、とりわけ「相性のよい」組み合わせであるように思われる。

では、この「相性のよさ」は、どのような性質を持つものなのだろうか。本稿では、この点をコーパスデータに基づいて計量的に検討し、「なんかこう」という連鎖がどの程度慣習化しているのかを明らかにすることを目的とする。具体的には、①「なんか」と「こう」の結びつきがどの程度強く、他の組み合わせと比べてどの程度特異なものであるかを調べる。

[†] wuchuqi.research@gmail.com

②その結びつきの強さが対話と独話で異なるかを検討する。③両形式が音声上においても一つのまとまりとして産出されているかを確認する。

以上の分析を通じて、「なんか」と「こう」の親和性が、それぞれの形式が持つ機能上の特性や使用環境の重なりとどのように関係しているのか、また、反復的な使用を通じて「なんかこう」が一つの連鎖として定着しつつあるとみなしうるかについて考察する。

2. 先行研究と本発表の位置付け

「なんか」については、これまで、命題内容に対する話者の関与を弱めるヘッジとしての機能、発話冒頭や話題転換部に現れて談話の展開を調整する談話標識としての機能、さらには、適切な語が見つかるまでの時間を確保する語探索フィラーとしての機能などが指摘されてきた（鈴木 2000；飯尾 2006；杉崎 2019 など）。ここで注目すべきは、「なんか」が特定の一機能に対応する形式ではなく、発話の文脈や使用位置に応じて複数の機能を担う多機能的な形式として記述されてきた点である。

一方、「こう」は、本来は指示副詞であるが、話し言葉においては、話者の念頭にあるイメージや様態、方向性などを聞き手に提示するフィラーとしても用いられることが指摘されている（山根 2002；星野ほか 2022 など）。この意味で、フィラーとしての「こう」は、後続する内容を具体的に言語化する前に、そのおおよそのイメージを先取りして提示する働きを持つものと考えられる。もっとも、こうした「こう」を指示副詞としての用法からどの程度独立したものとみなすべきかについては議論があり、両者の連続性と区別のあり方も検討されてきた（星野ほか 2022）。

「なんか」と「こう」のそれぞれについては、上述のように、その機能をめぐって一定の研究蓄積がある。しかし、両者が連続した「なんかこう」という形式そのものに焦点を当て、その結びつきの強さや音声上のまとまりを計量的に検討した研究は、管見の限りない。そこで本発表では、個々の形式がどのような機能を持つかという従来の議論からいったん離れ、二つの形式が連続することによって生じる結合関係そのものに注目する。言い換えれば、「なんか」と「こう」の間にどの程度強い引力が働いているのかを明らかにしようとするものである。

この問題を考える上で、本稿では、用法基盤モデルにおけるチャンク化の議論を参照する（Bybee 2010）。その立場に立てば、構成要素それぞれの意味が保持され、連鎖全体の意味がそれらから合成的に理解できる場合であっても、反復的な使用を通じて、複数の形式が一つのまとまりとして記憶され、産出されるようになることがある。つまり、「なんかこう」の意味を「なんか」と「こう」の機能から説明できることと、「なんかこう」が運用上、一つのまとまりとして定着していることは、必ずしも矛盾しない。

こうした観点を踏まえ、本稿が直接の検討対象とするのは、「なんかこう」の意味がどの程度合成的であるかという問題ではなく、「なんか」と「こう」が実際の言語使用においてどの程度強く結びついているのか、また、そうした結びつきがどのような使用上の条件によって支えられているのかという問題である。

3. リサーチクエスション

以上の議論をふまえ、本発表では、「なんかこう」の結びつきと慣習化の実態を明らかにするために、以下の3点を検討する。

RQ1：「なんか」「こう」「なんかこう」「こうなんか」の4形式は、対話と独話において、どのような頻度分布を示すか。また、「なんかこう」と「こうなんか」の間には、どの程度の語順上の偏りが認められるか。

RQ2：「なんか」の後続要素として、「こう」はどの程度特徴的な位置を占めるか。また、「なんかこう」の共起強度は、語順および談話形式によってどのように異なるか。

RQ3：「なんかこう」は、音声上、一つの韻律的まとまりとして産出されているか。

4. 使用するデータと方法

4.1 使用するデータ

本稿では、対話データとして『日本語日常会話コーパス』(CEJC) のコアデータ (総語数 253,004 語) を、独話データとして『日本語話し言葉コーパス』(CSJ) のコアデータに含まれる独話資料 (総語数 441,766 語) を使用する。両者を対照することで、対話と独話という談話形式の違いに加え、即興性の高い産出と計画性の高い産出という産出条件の違いについても検討することが可能になる。

また、「なんかこう」の韻律的なまとまりを検討するため、各コーパスのリレーショナルデータベース (RDB) から、ポーズ情報ならびにアクセント句 (AP) およびイントネーション句 (IP) の境界情報を取得し、分析に使用した。

4.2 検索条件と除外基準

分析対象となる 4 形式は、国立国語研究所のコーパス検索アプリケーション「中納言」を用いて、CEJC (データバージョン 2023.03) および CSJ (データバージョン 2018.01) から抽出した。具体的な検索条件を表 1 に示す。なお、「なんか」の検索にあたっては、語彙素「何」に加え、発音形出現形を「ナン」に指定した。これにより、同じ語彙素「何」に属する形式のうち、代名詞用法を中心とする「なにか」を検索結果から除外した。

表 1 4 形式の検索条件

形式	検索条件
なんか	キー: 語彙素=何 AND 発音形出現形=ナン、後方共起: 語彙素=か (ON 1)
こう	キー: 語彙素=こう
なんかこう	上記「なんか」+ 後方共起: 語彙素=こう (ON 2)
こうなんか	キー: 語彙素=こう + 後方共起: 語彙素=何・発音形=ナン (ON 1)、語彙素=か (ON 2)

次に、検索結果に含まれる非フィラー用法を除外した。除外にあたっては、分析の再現性を確保するため、前後の文脈に対する個別な意味判断ではなく、隣接する短単位 of 語彙素に基づく一定の基準を設定した。具体的には、「こう」の直後に生起する短単位 of 語彙素が「遣る」「為る」「言う」「成る」のいずれかである場合を分析対象から除外した。この処理により、「こうやって」「こうして」「こういう」「こう言った」「こうなる」など、フィラーとはみなしにくい副詞的・文法的用法を同一の基準で除外することができる。この基準は、CEJC と CSJ の双方に共通して適用した。

また、「なんかこう」「こうなんか」のような連鎖形式についても、構成要素が上記の除外条件に該当する場合は分析対象から除いた。たとえば、「なんかこういう」は、「こう」の直後に語彙素「言う」が生起するため、「なんかこう」の用例には含めない。こうした処理を行うことで、単独形式の頻度と連鎖形式の頻度について、抽出・除外基準の整合性を確保した。

4.3 共起強度の指標

「なんか」と「こう」の共起強度を測定する指標として、以下の $\log\text{Dice}$ を用いる（恒川 2020）。

$$\log\text{Dice} = 14 + \log_2(2f(XY) / (f(X)+f(Y)))$$

$\log\text{Dice}$ は、コーパスサイズの影響を受けにくく、理論上の上限値が 14 に定められている。このため、規模の異なる CEJC と CSJ の間で共起強度を比較する上で適した指標であると考えた。共起強度の指標としては PMI も広く用いられるが、PMI は構成要素の出現頻度が低い場合に値が大きくなりやすいという性質を持っている。本発表のデータでは、独話における「なんか」の出現頻度が対話に比べて低いいため、PMI を用いると、独話における「なんかこう」の共起強度が見かけ上高く評価される可能性がある。そこで、本稿ではコーパス間の比較には PMI を用いず、 $\log\text{Dice}$ を採用する。

あわせて、実際の共起頻度が、両形式が独立に生起すると仮定した場合にどの程度予想される値を上回るかを確認するため、以下の式によって期待頻度を算出し、実際の出現頻度との比を併記する。

$$\text{期待頻度} = f(X) \times f(Y) / N$$

5 結果

5.1 4 形式の頻度分布と語順

除外処理から得られた 4 形式の出現頻度を表 2 に示す。括弧内の数値は、百万語あたりの出現頻度（pmw）に標準化された値である。

表 2 4 形式の出現頻度（粗頻度 / pmw）

コーパス	なんか	こう	なんかこう	こうなんか
CEJC	1,714 (6,775)	476 (1,881)	53 (209)	15 (59)
CSJ	674 (1,526)	751 (1,700)	34 (77)	5 (11)

表 2 からは、まず、単独形式である「なんか」と「こう」が、対話と独話で異なる分布を示すことがわかる。「こう」の頻度は対話で 1,881、独話で 1,700 であり、両者の差は小さい。これに対し、「なんか」は対話で 6,775、独話で 1,526 となり、対話における出現頻度は独話の約 4.4 倍に達する。したがって、単独形式に認められる談話形式間の差は、主として「なんか」の頻度差によるものと言える。

次に、連鎖形式の語順に着目すると、「なんかこう」は「こうなんか」より一貫して高い頻度を示した。具体的には、「なんかこう」の出現頻度は、「こうなんか」の 3.5 倍（対話）、6.8 倍（独話）であった。このことから、対話・独話のいずれにおいても、「なんか → こう」という語順に明確な偏りが存在することがわかった。

5.2 「なんか」の後続要素における「こう」の位置

次に、「なんか」の直後に生起する主要な要素について調べた。その結果、対話と独話では異なる分布が認められた。対話では、終助詞「ね」が 5.0%で最も多く、以下、「こう」（3.7%）、「さ」（2.7%）、「ちょっと」（2.7%）と続いた。これに対し、独話では、「こう」が 5.8%で最も多く、「あの」（4.5%）、「その」（3.3%）、「そう」（3.1%）がこれに続いた。一方、

対話で高い頻度を示した「ね」は 0.9%に低下し、「さ」は出現しなかった。

こうした結果を見る限り、「なんか」の後続要素は、対話では「ね」「さ」のような聞き手への働きかけに関わる形式が目立つのに対し、独話では「こう」「あの」「その」「そう」のような、描写や言葉探索に関わる形式が上位を占める。この点で、「なんか」に後続する要素の分布には、談話形式による違いが存在すると考えられる。

しかし、以上は粗頻度に基づく比較であり、個々の後続要素がコーパス全体でどの程度使用されているかは考慮されていない。たとえば、もともと高頻度の形式であれば、特別に「なんか」と結びつきやすいわけではなくても、「なんか」の直後に多く生起する可能性がある。そこで、各後続要素について logDice を算出し、「なんか」との共起強度を比較した。結果を表 3 に示す。

表 3 「なんか+後続要素」の共起強度 (logDice)

後続要素	CEJC 共起	全体	logDice	CSJ 共起	全体	logDice
こう	63	476	9.88	39	751	9.81
ちょっと	46	1,006	9.11	9	768	7.68
その	27	741	8.49	22	2,265	7.94
あの	31	1,820	8.17	30	5,267	7.37
そう	41	6,167	7.41	21	1,463	8.33
ね	86	7,698	8.23	6	2,936	5.77
さ	47	1,535	8.89	0	370	-

表 3 を見ると、「こう」の logDice は、対話で 9.88、独話で 9.81 となり、いずれにおいても比較対象中で最も高い値を示した。2 位以下の形式は、対話では「ちょっと」(9.11)、独話では「そう」(8.33) のように談話形式によって入れ替わるが、「こう」が最も高いという点は両者に共通している。なお、「こう」の全体頻度について、非フィラー用法を除外した値 (CEJC : 476、CSJ : 751) に代えて、除外前の粗頻度 (CEJC : 698、CSJ : 1,132) を用いて計算した場合にも、この順位は変わらない。

以上から、粗頻度だけを見れば「なんか」の主要な後続要素は談話形式によって異なるものの、各形式の総出現頻度を考慮した共起強度に着目すると、「こう」は対話・独話のいずれにおいても「なんか」と最も強い結びつきを示すことがわかった。すなわち、「こう」は、「なんか」の後続要素の中でも、特別な位置を占める形式であると言える。

5.3 「なんかこう」の共起強度と語順

次に、「なんかこう」と「こうなんか」について、独立を仮定した場合の期待頻度と実際の頻度を比較するとともに、logDice による共起強度を算出した。結果を表 4 に示す。

表 4 両連鎖形式の期待頻度および共起強度

コーパス	形式	期待頻度	実際頻度	実際 / 期待	logDice
CEJC	なんかこう	3.2	53	16.4	9.63
	こうなんか	3.2	15	4.7	7.81
CSJ	なんかこう	1.1	34	29.7	9.61
	こうなんか	1.1	5	4.4	6.85

表 4 からは、以下の 2 つの点が読み取れた。まず、「なんかこう」の実際の出現頻度は、独立を仮定した場合の期待頻度を大きく上回っている。具体的には、対話で期待頻度の 16.4 倍、独話で 29.7 倍に達した。一方、「こうなんか」も期待頻度を上回るものの、その比は対話で 4.7 倍、独話で 4.4 倍にとどまっている。両連鎖は構成要素が共通しているため、それぞれのコーパス内では期待頻度も同一となる。したがって、「なんかこう」と「こうなんか」の実際の頻度の差（対話 53 : 15、独話 34 : 5）は、共通する期待値に対して両語順がどの程度異なる振る舞いを示すかという観点から捉えることができると考えられる。

次に、「なんかこう」の logDice は、対話で 9.63、独話で 9.61 となり、両者はほぼ同程度であった。このことから、少なくとも logDice で見る限り、「なんかこう」の共起強度には、対話と独話の間に大きな違いは認められなかった。これに対し、逆順の「こうなんか」の logDice は、対話で 7.81、独話で 6.85 となり、いずれも「なんかこう」を下回った。

以上のことから、「なんか」と「こう」の結びつきは単に両形式が隣接しやすいというだけではなく、「なんか → こう」という特定の語順に強く偏ったものであることがわかった。また、「なんかこう」の共起強度が対話と独話でほぼ同程度であることは、この結びつきが特定の談話形式に限られたものではない可能性を示唆する。

5.4 「なんかこう」に後続する要素

次に、「なんかこう」の直後に生起する要素を分類した。その結果、対話・独話のいずれにおいても、名詞・動詞・形容詞などの内容語が最も高い割合を占めた。具体的には、対話で 54.7%、独話で 67.6% であり、いずれも全体の半数を超えていた。これに、「何」「そう」「こう」などの指示表現（対話 17.0%、独話 20.6%）、程度・様態を表す副詞など（7.5%、11.8%）が続いた。こうした結果から、「なんかこう」は、多くの場合、その直後に具体的な内容を導入し、後続する描写や説明へとつなぐ働きを持つことがわかった。

一方、後続要素の分布には、対話と独話の間に違いも認められた。対話では、「なんかこう」の後にさらにフィラーなどが続く例が 11.3% を占めたほか、次の(3)のように、「なんかこう」のまま発話が終了する例も 9.4% 認められた。

(3) でも、なんかこう。 (CEJC: K002_003a)

これに対し、独話では、フィラーや終助詞が後続する例も、「なんかこう」で発話が終了する例も認められず、すべての例で何らかの内容が後続していた。つまり、独話では、「なんかこう」が後続する内容を導入する前置きとして用いられる傾向が一貫しているのに対し、対話では、必ずしもその後に内容が明示されるとは限らない。

この違いは、「なんかこう」の機能が談話形式によって部分的に異なる可能性を示唆する。独話では、話者自身が後続する内容を言語化していく必要があるのに対し、対話では、「なんかこう」の段階で発話をいったん止め、具体的な内容の補完を聞き手との共有知識や相互行為に委ねることも可能であると考えられる。

5.5 「なんかこう」の韻律的統合

最後に、「なんかこう」が音声上どの程度一つのまとまりとして産出されているかを検討するため、2 要素間のポーズの有無、同一イントネーション句 (IP) 内への生起、同一アク

セント句 (AP) 内への生起という 3 つの観点¹から韻律的特徴を調べた。結果を表 5 に示す。

表 5 「なんかこう」と「こうなんか」の韻律的特徴

連鎖形式	韻律指標	CEJC	CSJ
なんかこう	総出現頻度	53	34
	間にポーズなし	51 (96.2%)	29 (85.3%)
	同一 IP 内	51 (96.2%)	19 (55.9%)
	同一 AP 内	35 (66.0%)	13 (38.2%)
こうなんか	総出現頻度	15	5
	間にポーズなし	11 (73.3%)	1 (20.0%)
	同一 IP 内	11 (73.3%)	3 (60.0%)
	同一 AP 内	9 (60.0%)	0 (0.0%)

表 5 からは、「なんかこう」は、2 要素間にポーズを置かず、一続きに産出される割合がきわめて高いことがわかった。具体的には、対話で 96.2%、独話でも 85.3%に達しており、談話形式を問わず、高い連続性が認められる。

また、統合の程度は、より厳しい韻律単位を基準とするにつれて低下する。特に、両要素が同一 AP 内に生起する割合は、対話で 66.0%、独話で 38.2%にとどまった。つまり、「なんかこう」は、多くの場合、ポーズを挟まず連続的に産出される一方、常に一つの AP に統合されているわけではない。フィラーはそれ自体で独立した AP を形成することも少なくないため、同一 AP への統合は、ポーズの有無や同一 IP への生起に比べ、より厳しい基準であると考えられる。この意味で、「なんかこう」は高い韻律上の連続性を示すものの、より緊密な韻律的統合はなお部分的な段階にあると考えられる。

さらに、「なんかこう」の韻律的統合には談話形式による違いも認められた。ポーズなし、同一 IP 内、同一 AP 内のいずれについても、対話の割合が独話を上回った。特に同一 IP 内への生起率は、対話の 96.2%に対して独話では 55.9%まで低下している。このことから、計画性の高い独話では、「なんか」と「こう」が隣接して産出される場合にも、両者の間に韻律の境界が保持されやすい可能性が考えられる。

これに対し、逆順の「こうなんか」は、特に独話において統合の程度が低かった。ポーズを伴わずに産出された例は 5 例中 1 例にすぎず、同一 AP 内に生起した例は認められなかった。出現数が少ないため慎重な解釈が必要であるが、以上の結果は、「なんかこう」に認められる韻律的なまとまりが、単なる二つのフィラーの隣接によるものではなく、「なんか → こう」という特定の語順と結びついている可能性を示唆している。

6 考察：「なんか」と「こう」はなぜ相性がよいのか

以上の結果を踏まえ、ここでは、「なんか」と「こう」がなぜ強く結びつくのかについて考察する。

まずは両形式の生起環境の重なりである。5.2 で見たように、「なんか」の後続要素は談話形式によって異なる。対話では「ね」「さ」のような聞き手への働きかけに関わる形式が目

¹ アクセント句とは、句頭の上昇を伴い、最大 1 つのアクセント核を有する句を、イントネーション句とはアクセント句のダウンステップの効果が続く範囲を指す (西川 2026)

立つのに対し、独話では「こう」「あの」「その」など、描写や言葉探索に関わる形式が上位を占めていた。また、5.1 で確認したように、「こう」の出現頻度（百万語あたり）は対話と独話で大きく変わらない一方、「なんか」は対話において顕著に高い頻度を示す。このことから、「なんか」は多様な談話環境に現れうる一方、その直後にどのような形式が生起するかは、発話が置かれた環境によって異なると考えられる。特に、発話者が物事を描写しながら適切な表現を検索する場面では、「こう」が「なんか」の主要な後続要素となる。こうした場面は独話に典型的に見られるものの、対話にも生じうる。したがって、「なんか」と「こう」の親和性を支える大きな要因として、両形式が描写や言葉探索という使用環境を共有していることが挙げられる。

しかし、両形式が同じ環境に現れやすいというだけでは、「なんかこう」という決まった語順が優勢になる理由までは説明できない。そこで次に、それぞれの機能に目を向けたい。先行研究によれば、「なんか」は、後続する内容に対する断定性を弱めるとともに、適切な表現を想起するための時間を確保する働きを持つ。一方、「こう」は、まだ十分に言語化されていないイメージや様態を、後続内容に先立って提示する働きを持つ。こうした機能をふまえると、言葉の想起と描写が並行して進む場面で、両形式は補い合う役割を果たしていると考えられる。すなわち、発話者は、これから述べる内容が必ずしも確定なものではないことを示しつつ、同時に、何らかのイメージや方向性がすでに念頭にあることを示す必要がある。「なんかこう」は、前者を「なんか」、後者を「こう」が担うことによって、この二つの課題を同時に処理する形式として理解することができる。

5.4 の結果からも、「なんかこう」の直後には、名詞・動詞・形容詞などの内容語が対話で 54.7%、独話で 67.6% 生起していたことがわかる。また、指示や程度・様態を表す副詞、オノマトペを加えると、後続要素の多くが何らかの描写や説明に関わる形式となる。つまり、「なんかこう」は、単に発話の時間を埋めるだけでなく、その後続く内容を準備し、導入する位置に現れやすいと言える。こうした機能面での関係は、「なんか → こう」という語順の偏りについても解釈を与える。まず「なんか」によって後続する表現の不確定性を示し、その後に「こう」によって言語化されつつあるイメージや方向性を提示するという順序は、語探索から具体的な内容の提示へと進む発話産出の時間的な流れとも合う。この点から見れば、「なんか → こう」は、両形式の機能的な組み合わせによって動機づけられた語順である可能性が示唆される。

これに対し、逆順の「こうなんか」では、2 形式が必ずしも一つのまとまりとして同じ作業を担っているわけではない。たとえば、次の例を見てみよう。

(4) 子供がこう、なんか、指を入れちゃったんだけど (CEJC: C001_001)

この例では、「こう」が動作の様態を提示する一方、「なんか」は後続する名詞句に対するぼかしとして用いられており、両者はそれぞれ別の働きを担っているように見える。もちろん、「こうなんか」の出現頻度自体が少ないため一般化には難しいが、この例は、順方向の「なんかこう」と逆方向の「こうなんか」では、単に語順が異なるだけでなく、2 形式の機能面の関係そのものが異なる可能性を示している。

以上のように、「なんか」と「こう」の結びつきは、両形式が描写や言葉探索という使用環境を共有し、機能面においても補い合いであることによって動機づけられていると考えられる。しかし、それだけでは、「なんかこう」の logDice が対話で 9.63、独話で 9.61 とほ

ば一致し、さらに「こう」が両コーパスで一貫して「なんか」と最も強く結びつく後続要素となったことを十分には説明できない。こうした結果は、「なんかこう」が個々の談話環境でその都度組み合わせられるだけでなく、反復使用を通じて一つの連鎖として一定程度慣習化している可能性を示唆している。

また、韻律分析の結果も、「なんかこう」は、対話の 96.2%、独話の 85.3%で 2 要素間にポーズを伴わず、時間的には高い連続性を示した。一方で、同一 AP 内に生起する割合は 66.0%、38.2%にとどまる。したがって、「なんかこう」は、分布上の結びつきと時間上の連続性という点では強く定着しているものの、より緊密な韻律的統合はなお部分的な段階にあると考えられる。

以上をまとめると、「なんかこう」は、使用環境の共有と機能の相補性によって生じた結びつきが、反復使用を通じて一つの連鎖として定着しつつある形式と位置づけられる。すなわち、分布上は強く慣習化している一方、韻律的統合はなお途上にある連鎖である。なお、韻律的統合は独話より対話で高かったが、CEJC と CSJ は談話形式以外の点でも異なる。この点については、今後さらに検討する必要がある。

7 おわりに

本稿では、「なんか」と「こう」はなぜ相性がよいのかという問いを出発点として、両形式の結びつきを頻度分布、共起強度、韻律的特徴の 3 つの側面から検討した。その結果、「なんか」と「こう」は、描写や言葉探索に関わる使用環境を共有するとともに、それぞれが異なる役割を担うことによって、「なんか → こう」という語順で結びつきやすいことが示された。また、「こう」は、対話・独話のいずれにおいても「なんか」と最も強く結びつく後続要素であり、「なんかこう」の共起強度も両談話形式でほぼ同程度であった。さらに、2 要素間には高い韻律的連続性が認められた。

以上の結果から、「なんかこう」は、その都度形成される組み合わせというよりも、使用環境の共有と機能上の相補性を背景として反復的に使用されるなかで、一つの定型連鎖として定着しつつある形式と考えられる。ただし、同一 AP 内への統合は部分的であり、韻律上完全に融合しているわけではない。この意味で、「なんかこう」は、分布上は強く慣習化している一方、韻律的統合はなお途上にある連鎖として位置づけることができる。

今後の課題として、まず、「なんかこう」の談話機能をより詳細に検討することである。特に、連鎖の中でも「こう」が本来の描写的・指示的機能を保持しているのか、それともその機能が「なんか」の機能枠組みに取り込まれているのかについて、「なんかこう」「なんか」単独、「こう」単独に後続する内容を分析する必要がある。そして、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』BCCWJ を加えた書き言葉との対照である。これにより、「なんかこう」の生起が、話し言葉と書き言葉という媒体の違いとどのように関係するのか、さらに、その背後にある産出の即興性や計画性とどのように関わるのかを検討したい。

文 献

- 飯尾牧子(2006)「短大生の話し言葉にみる談話標識「なんか」の一考察」『東洋女子短期大学紀要』(38), pp.67-77
- 小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香(2023)「『日本語日常会話コーパス』設計と構築」『国立国語研究所論集』24, pp.153-168

- 国立国語研究所 (2006) 「日本語話し言葉コーパスの構築法」 国立国語研究所.
- 杉崎美生(2019) 「自己開示場面における「なんか」の働き」『待遇コミュニケーション研究』 16 (0), pp.1-17
- 鈴木佳奈(2000) 「会話における「なんか」の機能に関する一考察」『大阪大学言語文化学』 9, pp.63-78
- 恒川元行(2020) 「logDice 係数はどのような共起指標か」『言語文化論究』 45, pp.35-44
- 西川賢哉(2026) 「Praat を活用した分析」 小磯花絵 (編)『日常会話コーパスの設計・構築・利活用』, 研究社, pp.162-194
- Bybee, J. (2010). Language, usage and cognition. Cambridge University Press.
- 星野祐子・田嶋明日香・高崎みどり 「『日本語日常会話コーパス』を利用した指示語（コソアド）の用法の識別について」 国立国語研究所論集 (23), 99-117, 2022
- 山根智恵(2002)『日本語の談話におけるフィラー』, くろしお出版

関連 URL

- 国立国語研究所 (2018)『日本語話し言葉コーパス』(バージョン 2018.01, 中納言バージョン 2.7.2) <https://clrd.ninjal.ac.jp/csj/> (2026 年 8 月 9 日確認)
- 国立国語研究所 (2023)『日本語日常会話コーパス』(バージョン 2023.03, 中納言バージョン 2.7.2) <https://chunagon.ninjal.ac.jp/cejc/> (2026 年 8 月 9 日確認)
- コーパス検索アプリケーション『中納言』 <https://chunagon.ninjal.ac.jp>